

心理学 ミュージアム



立命館大学文学部 教授・研究部長
サトウタツヤ

Profile

東京都立大学大学院博士課程中退，同大学助手，福島大学行政社会学部助教授を経て，2001年より立命館大学助教授，教授。2012年から同大学研究部長を兼ねる。著書は『質的心理学の展望』、『方法としての心理学史』（いずれも新曜社），『心理学史』（共編，学文社）など。

資料保存小委員会とその活動



写真1 日本心理学会初代会長・松本亦太郎（1865-1943）



写真2 日本心理学会第1回大会記念写真（1927，東京帝国大学）



写真3 『日本心理学会五十年史』と『75年史』

今回からは、日本心理学会教育研究委員会に設置されている資料保存小委員会が連載を担当します。まず委員会のメンバーや意図や目標について、ご紹介しましょう。

委員長 サトウタツヤ／立命館大学

委員 荒川 歩／武蔵野美術大学, 鈴木朋子／横浜国立大学, 高砂美樹／東京国際大学,
日高聡太／立教大学, 藤 健一／立命館大学, 吉村浩一／法政大学

現在は吉村、藤両先生を中心に古典的機器の撮影を行っています。その内容については次号からお伝えしていきます。

さて、日本における心理学史の展開は、松本亦太郎（1937）『心理學史』を嚆矢として、今田恵（1962）『心理学史』など、重厚な思想的心理学史を中心に展開され、梅本堯夫・大山正（1994）『心理学史への招待：現代心理学の背景』、そして大山正先生の『心理学史：現代心理学の生い立ち』の出版に連なっています（2010）。一方で、心理学史のみを専門とする心理学者は殆ど存在せず、児玉齊二先生のみが気を吐いていました。児玉先生は日本で最初の『心理学』という本の原著者であるジョセフ・ヘヴンについて詳細な研究を行ったり、日本で最初の心理学者・元良勇次郎の博士論文が「交換」（Exchange）であることを突き止めるなど、後につながる成果をあげました。

そして、1990年代後半に、日本の心理学史を対象にしたムーヴメントが起きてきます。西川泰夫先生は1996年に『『日本の心理学史』保存への問題提起』という論文を発表し、日本の心理学史に関する資料を保存するためには「組織的に対応するという以外に道はない」と喝破しています。さらに踏み込んで、心理学博物館の建設の提案を行っています。ほぼ同時期に、一冊すべてを日本の心理学史にあてた著書が出版されました。佐藤達哉・溝口元（1997）『通史 日本の心理学』です。この本は科学史研究者である溝口元先生が方法論を指導したことで、日本の心理学史の研究水準を一気に引き上げることになりました。1999年には『心理学史・心理学論』創刊号が刊行されました。

さて、西川泰夫先生を中心とした科研費プロジェクトが結成されたのは1998年のことでした。1998～2000年度 科研費『日本の現代心理学形成にかかわる学問史的検討』です。この研究チームは1998年8月に大がかりな調査旅行を行いました。アメリカ・オハイオ州のアクロン大学の心理学史アーカイブや、クラーク大学の心理学研究室／大学アーカイブを訪問して、史資料の保存のあり方の見聞を広げてきたのです。

この他、同じく科研費による2000～2001年度の辻敬一郎先生『本邦心理学における実験機器利用の史的展開』や、最近では、これまた科研費2010～2012年度の長田佳久先生『心理学の古典的実験機器に関するデータベース作成とその活用』などのプロジェクトが行われ、日本の心理学史の資料保存の取り組みが地道にかつ継続的に行われていることがわかります。

心理学史というと、古いことをやっても仕方無い、とか、何のためにあるの？という疑問の声が聞かれますが、歴史は、事実のそのものではなく、物語とのかけあわせで成立するものです。「フェヒナーの精神物理学がヴントの実験心理学につながって心理学が発展した」という歴史観も、事実をもとにした物語を「起源神話」として奉じているという側面があります。また、歴史に名を残さない、多くの人の多くの活動があるからこそ、歴史は成り立っていると考えれば、埋もれてしまった歴史を掘り起こすことも重要です。現在、世界の心理学史においては、日本の心理学史はまさに「埋もれている」歴史にすぎません。私たち資料保存小委員会は、歴史機器を保存する活動に従事するとともに、日本の心理学の豊かな歴史を世界に発信しようとしています。

2016年度には、国際心理学会（ICP）が横浜で開催されますが、絶対に日本の心理学史の紹介が必要となります。そして、その10年後の2026年は日本心理学会誕生100年目となる年です。2027年に『日本心理学会百年史』を刊行すべく本委員会は、資料保存に取り組んでいきます。日本心理学会はこれまで『五十年史』と『75年史』を刊行してきましたので、それを引き継いでいくことになります。

最後に、個人的には、日本の心理学者たちのオーラルヒストリーを集めるということをしてみたいところです。かつての心理学モノグラフのような『モノグラフ：日本の心理学者』のような小冊子を個人ごとに刊行できたら面白いだろうと考えています。質的調査の重要性も理解してもらえることになると日本の心理学の幅も広がり、歴史を知ることが未来を創ることにつながると思感してもらえると幸いです（最後は蛇足）。